

新島襄と函館

講演	小枝 弘和〔こえだ・ひろかず〕
講師紹介	同志社大学同志社社史資料センター社史資料調査員

はじめに

同志社社史資料センターの社史資料調査員をしております、小枝と申します。本日は「新島襄と函館」というタイトルでお話をさせていただきます。よろしく願いいたします。

新島襄と函館と聞けば、歴史的事実を思いつく方もいらっしゃると思います。簡単に密出国までの新島襄の生涯を振り返りますと、1843年（天保14）江戸の安中藩邸で生まれました。幼名を七五三太と言いました。以降、新島はおおよそ20年間江戸という特定の地域で青少年期を過ごします。この間、彼が江戸を出たのは数回で、ほぼ彼の考え方は江戸のなかで形成されていきます。その後、彼が密出国を敢行するのは21歳のときになります。1864年（元治元）、一般的に幕末と定義される時期です。今年は密出国からちょうど150年を刻む年になります。その後、アメリカに渡り、約10年にわたる米欧での学びを終えて、1874年（明治7）帰国し、翌年同志社英学校を設立することになります。

さて、函館との関係ですが、今述べたように、新島は函館に行く前にはほぼ江戸の外に出たことがないという状況です。そのような新島が函館で何を感じ、何を考え、なぜ密出国を敢行したのか、あるいは、函館は彼にとってどのような場所であったのか、このあたりのことを本日は考えていきたいと思います。まずは、新島襄と函館の関係がこれまでに出版された彼の伝記でどのように扱われているか見ていきたいと思います。なかでも、函館行きの理由、密出国の動機を中心とし、その根拠となった資料が何かも示していきたいと思います。

伝記に見る函館密出国の理由

数多くある新島の伝記のなかでいくつか事例を挙げていきます。例えば、1955年に刊行された魚木忠一氏の『新島襄 人と思想』には、密出国の理由を要約すると、私利私欲ではない、国家に貢献したいということが書かれています。また新島を愛国の志士とも位置付けています。この根拠となった資料を見ていきますと、新島がアメリカから家族に宛てた手紙を根拠としていました。要するに、密出国成功後に書いた手紙が根拠になっています。

次に、1973年に刊行された和田洋一氏の『新島襄』を見ますと、函館行きの理由は、外国人と接触して国外への脱出を目論んでいたからであることが書かれています。この根拠となった資料は、新島の手記My younger daysという資料です。この資料は、新島が永眠した翌年1891年（明治24）に刊行されたA. S. HardyによるLife and Letters of Joseph Hardy Neesimaという伝記に収録されています。しかし、原本が存在せず、またこの資料も密出国成功後に書かれた資料です。

同じく和田氏の伝記には、新島の密出国の理由を、アメリカで学びたい、世界を回りたい、という彼の考えがあったことが書かれています。この根拠となった資料は新島襄の手記「函館からの略記」です。「から」というタイトルが付いていますので、その内容はやはり密出国敢行後に書かれたものです。

比較的読みやすい伝記として、1965年に刊行された岡本清一氏の『新島襄』を事例に出しますと、密出国の理由としてこれまでとは違ったことが書かれています。新島が『ロビンソン・クルーソー漂流記』やアメリカの地理書『連邦志略』などを読み、国民一人ひとりが自立していることを知った、キリスト教を学びたいと思った、ということが書かれています。この根拠も先ほど紹介した伝記Life and Lettersです。この伝記は今では残されていない資料で書かれた貴重なものですが、これまでに出版された伝記や論文において、新島の函館行きの理由や密出国の動機の根拠とされてきました。ただし、伝記であるがゆえにどのような資料を根拠として書いたのか、不明な部分も多く、また密出国成功後に書かれた資料を多用しています。

最後の事例として、伝記ではありませんが2002年に刊行された『現代語で読む新島襄』を取り上げます。皆さんも見ただことがある書籍かもしれませんが。この書籍のなかには「脱国の理由書」という資料が収められています。この資料には、新島が友人宅の書斎で漢訳聖書を読み、神を理解した、英語の聖書を読みたいと思い、函館行きを考えるようになったと、彼の函館行きの理由の根拠が書かれています。そもそも「脱国の理由書」の原文は英文で、やはり伝記Life and Lettersに収められています。原本は存在しません。書いた時期はアメリカ到着直後で、アメリカで後見人となってくれたA・ハーディ氏に書くよう命じられて書いた文書です。やはり密出国成功後に書かれた資料が根拠になっています。

わずかな事例を挙げたにすぎませんが、伝記の多くが、新島が密出国成功後に残した資料を元に書いていることは事実です。それでは、密出国以前の資料も合わせてみると何が見えるのか、これから密出国前の資料を元に、新島の足跡を追い、最後に皆さんで新島と函館の関係を考えていただきたいと思います。

江戸での新島七五三太

それでは、新島が生まれた空間から見ていきたいと思います。彼は江戸の安中藩邸で生まれました。その場所は、江戸城の堀を越えたとすぐ東隣にありました。また、彼の父・民治は下級武士でしたが、祐筆という職を務めたいわゆる藩の書記官、文官です。同志社には父の手によるとと思われる安中藩の文書が残されていますので、新島も父や住んでいた環境から最新の情報を聞いていた可能性があります。

次に家族構成ですが、新島は長男です。ただし、4人の姉がいました。逸話として、新島の祖父・弁治が七五三太の誕生に喜び、「しめた！」と叫んだことが、新島の幼名となったとも言われます。新島家は武士の家系でした。よって、男児が誕生することは「家」の存続にとって重要な意味をもちました。要するに、新島は新島家に望まれた男児でした。また、姉が4人いることも彼の個性に影響を与えたと考えられます。本日は触れませんが新島と妻の八重とでやり取りされた手紙を見れば、頼り甲斐のある女性に対する新島の態度がよく分かります。

視点をえて、同志社が所蔵する新島の幼いころの資料を見てみますと、興味深いものがあります。例えば、生まれたばかりの新島を包んでいた産着の切れ端や、新島の元服の際に使用したと考えられる陰陽刀が残されています。これらは新島家が残したもののようです。新島は帰国後、郷里から両親と姉一人を呼び寄せ、京都と一緒に暮らしました。その際に持たされたものと考えられます。21歳で密出国し、その後、行方も分からなかった新島を家族が如何に大切に思っていたかをうかがわせる資料ではないかと私は考えています。

新島は幼少のころ、わんぱくであったがゆえに、絵を習わされたと伝記に書かれていまして、それを示す新島の絵があります。事例として「鉄拐仙人図」と「撫子花と如雨露の図」を出しました。10代前半の作と考えられるものです。特に「撫子花と如雨露の図」には祖父・弁治による「楽にひまなき撫子の手入れかな」という賛があります。祖父が如何に孫をかわいいと思っていたかがうかがい知れる資料です。

このように、新島は新島家で大切に育てられた長男でした。これから成長していく彼は、他の武士の師弟と同じように、漢学や蘭学を学びます。ここで考えておきたいことは、彼は幼少年期にどのようなことを考えていたのかということです。正直、資料はあまり残っておりませんが、先ほど新島は江戸城のすぐそばで生活をしていることを紹介しました。おそろくなんらかの情報は得ていたものと推察されます。また、彼が10歳のときにはペリーが来航し、11歳のときに日米和親条約、15歳のときに日米修好通商条約と安政の大獄、17歳のときには勝海舟が咸臨丸でアメリカへ行き、このときには桜田門外の変が起こり、老中井伊直弼が暗殺されました。18歳のときには和宮降嫁、19歳のときには時の老中安藤信正の暗殺未遂事件が坂下門外で起こり、京都では治安維持のため京都守護職が設置されます。新島が住むすぐ近くで、または江戸を巡って事件が起こります。父が祐筆をしておりますし、新島も手伝っていた経緯がありますので、彼になんらかの情報が入っていたことは間違いありませんが、残念ながら、どのようなことを考えていたかを知ることは難しい状況です。わずかながら残る資料のなかで、新島が19歳のときに代数学のノートに書いた次のような漢詩があります。

男児生不遂志不如死入黄泉之下
男児生不遂志不如死吸地下之泉

（同志社編『新島襄—その時代と生涯』 1997年）

19歳まで過ごしてきたなかで、新島は志をもつようになりました。志の詳細は分かりませんが、これを遂げなければ死んでいるようなものだと言っています。何かを成し遂げたいという思いは密出国する前に抱いていたことは確かであることが分かります。

1 回目の快風丸乗船

新島は密出国する前に本格的に江戸の外を体験する機会を得ました。備中松山藩が購入した快風丸の試運転に乗船する機会です。先ほどの漢詩を詠んだ2カ月後の1862年（文久2）11月から翌年1月までの江戸と玉島（現在の岡山県）までの往復航海です。このとき、新島は部分的な日記「十一〔二〕月朔日よりの記」、通称「玉島兵庫紀行」を残しています。この日記のなかに興味深い記事があるので紹介します。

新島という人は興味をもったことを詳しく、また挿絵を交えながら書き残すという人でもあります。玉島から折り返して兵庫の港に入ったときのことを詳しく書いています。兵庫に上陸した新島が目指した場所がありました。湊川神社です。目的は楠木正成の墓参りでした。墓に到達するまでの道程も詳しく書いているのですが、参拝の様子を次のように書いています。

「内に楠廷尉（講師註 楠木正成）の廟あり。此二於て手洗ひ口そゞき廟前に拝すれば、何と無く古を思ひ起し、嗚呼忠臣楠子之墓と記したるを読みて一拝し、又読みて一拝、墓後に廻り朱氏の文を読めば益感し涙流さぬ計なり。」

（『新島襄—その時代と生涯』）

新島は昔を思い起こし、涙を流しています。これが何を意味するのか、考える必要があります。幕末、楠木正成は忠臣として非常に人気があったと言われます。その忠臣の姿を新島は思い起こし、心が通じる部分があり、涙を流したのではないかと想像されます。興味深いことに、この墓の拓本が、新島の自宅である新島旧邸に残っております。新島旧邸は一般公開されていますので機会があればご覧ください。なぜ自宅に拓本があるのか、由来は分かりませんが、密出国前に墓を訪れた新島と帰国後も自宅に墓の拓本を置いた意味は何か、興味深いところです。

このほかには詳しく記述された箇所は特にありません。なぜ、楠木正成が新島の心に響いたのかを考えることは、この時期の新島の心情や志を考える上で重要だと思います。

2 回目の快風丸乗船

さて、今お話しした航海の後、新島はもう一度快風丸に乗船することになります。1864年3月です。1回目の乗船から1年2カ月後になります。伝記を見ると、この時期に先ほど紹介しました『ロビンソン・クルーソー漂流記』やアメリカの地理書『連邦志略』、そしてキリスト教関連の漢訳の小冊子を読んだとあります。現時点で新島が直筆で書いた資料は存在ませんが、1回目の航海が彼に刺激を与えたことは推察できます。伝記には漢訳聖書を通じて天父を理解したとあります。この記述がどのような資料に基づいているかは分かりませんが、少なくともこの期間に海外を知る書物に接した可能性があることだけは確かと考えられます。それは、2回目の快風丸乗船に至る過程を見ていくなかで、彼が何かに刺激を受けていたことが考えられるからです。

その乗船までの過程ですが、新島が再び快風丸に乗船するのは、快風丸が函館へ向けて出発する5日前でした。新島が快風丸乗船後から付けた手記「函橋紀行」に基づいて内容を見ていきたいと思います。1864年3月7日、ジョン万次郎の元へ質問に出かけた新島は道中で、かつて快風丸に同乗した友人と出会い、4、5日以内に快風丸が函館に向かうことを聞きます。ここで交わった会話のなかで、新島は友人に函館に行く意思があるかどうか尋ねられました。彼は「是我之素志なり」と答えています。ここからの彼の行動は早く、この日のうちに両親からの反発を予想したので、安中藩の目付役である飯田逸之助に相談し、助力を仰ぎます。新島はこのときに飯田から快風丸を所持する備中松山藩からも許諾を得たほうがよいと勧められます。新島は飯田との話の感触を「此人然諾を重んず必らず余の為に力を竭さんと」と書き残しています。函館行きに向けての手応えを感じていました。新島はその日のうちに自宅で荷物をまとめ、寝床に入ります。なかなか眠れませんでした。浅い眠りに入り、「最早箱橋二至し夢を見けり」とすでに気持ちは函館にありました。

翌日3月8日には備中松山藩邸に行き、以前快風丸に同乗した塩田虎尾に会い、快風丸乗船の許諾を得たいと申し出ました。塩田には「此度之行ハ実に失ふへからさるの好機会なり」と説明したとあります。そして、塩田が「予の志に感し」、家老を経由して備中松山藩から乗船許可を得てくれたとあります。新島がどのような志を塩田に話したのかは分かりませんが、新島には函館で果たしたい志はこのときには確かにあったわけです。許可を得た新島は、「疾走する事飛如く」安中藩邸に戻り、許諾を得たことを飯田に伝えました。新島の気持ちの高ぶりを感じ取ることができます。

3月9日になると、快風丸の出発が11日になることを聞き、これを飯田に伝えます。飯田からは安中藩から内諾が出たことを新島は聞きました。彼はそのときの気持ちを「喜欣二堪兼不覺大声をして曰、嗚呼天我を棄てざるか、我業の成否此一挙にあり」と書き残しています。何を成し遂げたかったのか、彼は明記していませんが、前途が開けた喜びが如何に大きかったか、彼の言葉から察せられます。

安中藩は新島の函館行きの許可を出したわけですが、どのようなことが理由とされたのか、彼の父が残した資料「忝稽古修業一件」のなかに書かれています。この資料は、父が新島の件で藩に申し出た文書を写し書きした冊子で、当然新島が函館行きを申し出るのも本人が藩に対して申し出るのではなく、家督をもつ父が藩に対して文書を出し、許諾を求めました。そのときの文書は以下のようなものになります。

兼而之志願二御座候間右御船二乗組之儀相願箱館表江罷越武田斐三郎と申者方江入塾仕度尤箱館表は西洋人多分在留仕候処斐三郎方二入塾之者随意二洋人ノ学科伝習之儀出来申候由に御座候
依之奉忍入候得共可担成儀二御座候ハゞ彗ヶ年之御暇被下置罷越修業為仕度奉願候旦右二付而は多分ノ入用茂相掛辻茂自力二而は果敢敷修業茂出来兼候趣御座候間重々奉忍入難申上御座候得共只管御憐愍之筋被成下度奉願候何卒出格之御沙汰を以前書之趣御聞濟被成下候様仕度偏奉願候
此段御年寄衆中迄宜被仰上可被下候

以上

三月九日

大御目付中

新島民治

(同志社新島研究会編『新島研究』59 1980年)

資料から函館行きは武田斐三郎の塾である武田塾に入塾し、西洋人から学ぶことが目的となっています。期間は1年間で、藩からの1年間の遊学期間をもらい、給与ももらいたいというものです。これが藩に申し出た正式な理由であり、おそらく新島が両親に函館行きを説得した理由でもあると考えられます。新島の志全てを表した内容ではないと考えられますが、少なくとも函館に行く以前から、函館で外国人と接触することを前提としていたことは分かりますし、これは両親も藩も了解していたことになります。このときに彼が密出国を考えていたかどうかは分かりませんが、外の文化との接触に積極的であったことだけは、はっきりしています。

内諾を得た、翌3月10日は一日航海術や日本地図での勉強に費やしました。快風丸の出発予定日11日には安中藩から正式に許諾を得ます。同時に俸禄外修行料として1年15両を支給されることになりました。父の資料にあった内容が認められ、新島は正式に藩から函館に勉強のために派遣されたことになります。結局この日は川の水が少なかったため、沖合いに停泊する快風丸に向かうことが出来ず、函館へのは出発は翌12日となりました。

先ほど、函館行きの理由の一つ挙げましたが、もう一つ函館行きの気持ちをうかがうことができる新島の漢詩があります。1864年3月、快風丸乗船直前に書かれた漢詩です。「感算理説」という資料に次のように書かれています。

一襲弊袍三尺剣 回頭世事思悠々
男児自有蓬桑志 不涉五洲都不休

(『新島襄—その時代と生涯』)

男児には四方に名前を知らしめたい志があることが明言されています。この言葉は、新島もまた憂国の志士と呼ばれた人びと同じ意識をもっていたことを示していると考えられます。「五洲」を全て回るまでは終わらないとあり、この言葉がどの地域を指しているかははっきりしません。ただし、江戸を越えて外の世界に眼を向けていたことだけは漢詩が示しております。

函館での2カ月間

江戸を発った新島は4月21日函館に到着します。これから密出国を敢行する6月14日までの約2カ月間函館で過ごします。函館に着いた新島は藩に届け出たとおり、まずは武田塾の門を叩きました。しかし、武田は開成所教授となるために江戸にいたため不在でした。また、武田塾には4、5人の生徒がいるに過ぎず、とりたてて優れた人物もいないと新島は書き残しています。そこで彼が考えたことは、「西洋人の家に至らん事を企てり」ということでした。4月21日彼は武田塾塾頭の菅沼精一郎に外国人の食客になりたいと申し出て、適当な人物の紹介を相談したところ、日本語教師を探していたロシアの司教ニコライを紹介されます。その後、新島はニコライ宅に居を移し、日本語を教え、一方で英語をしてくれる人物を紹介してもらうなどして、外国人と積極的に接触しています。のちにニコライに密出国に関して相談したと伝記にありますが、どうも賛同を得られなかったとのことでした。

早々に武田塾に見切りをつけ、外国人とのより積極的な接触を求めた新島は、人物を得て、これを実行に移しました。では、新島は外国に対してどのような感覚をもっていたのか、それを資料から見ておきたいと思います。

新島は函館滞在中に幾つかの手記を残しています。そのなかの二つの資料から興味深い記事を紹介します。一つ目は「航海日記」という資料です。原本はなく、現在は写しのみが存在します。このなかにある5月21日と22日の次のような記述に着目しました。

5月21日
此夜葡瓦兒ノコンシル死ス

5月22日
各館及び港の異船二而は、葡国コンシルの悔ミと申事二而、国旗ヲ頂上より少し下げ候。然しなから日本の黒船は一切其の様な事致さず。是れ同盟国の礼を知らざると見ゆ、実に歎息の至也

(新島襄全集編集委員会編『新島襄全集5』同朋舎出版 1984年)

5月21日にポルトガルの領事が亡くなり、その翌日、湾に停泊中の諸外国の船舶は弔意を示すため、半旗を掲げていました。ところが、日本の船舶は半旗を掲げていませんでした。新島はこれを、同盟国の礼を知らない恥ずかしい行為であると書き残しています。この一文を見る限り、新島が外国を理解する対象と考えていることが推察されます。なぜこのような言葉を発する考え方をもちようになったのか、その経緯は分かりません。ただし、函館での経験や江戸で読んだとされる書物の影響が、少なからずあったのかもしれません。

二つ目は先ほど紹介した新島の自筆日記「函橋紀行」です。5月6日と7日の項目です。この二日間、新島は眼病治療のためにニコライに連れられて、ロシア総領事館内にあった病

院に行っています。新島はこの病院を訪れたときのことを挿絵入りで詳しく書き留めました。

病院には整った設備があり、栄養価のある食べ物準備され、カルテによる患者の管理がなされていました。また、薬は順次準備され、しかも病院はすべて無料であると書かれています。新島はこれらの病院の対応を、日本の医者と比べてはるかに優れていると認めながら、一方で「其者の魯人を慕ふ事を望む計なり」とも書き残しています。同じ意味の文章として「予切に嘆ず、函樞の人民多年魯の恵救を得ば、我が政府を背にし却て汲々として魯人を仰かん事を」とも書いています。十分かつ無料で提供される医療行為により、函館の人民の心がロシアに掌握されることを危惧していました。新島のロシアに対する危惧は、彼個人だけのものではありません。1808年には会津藩がロシアを警戒して蝦夷地警備を行った記録があり、以前より江戸幕府自体がロシアを警戒していました。ロシアとしては不凍港を得るために南下して領土を得る必要があり、北海道はまさにふさわしい土地であったと言えます。新島が抱いた危機感は、こうした幕府が抱いていた危機感に少なからず影響を受けた結果ではないかと私は考えています。

今、事例を二つ挙げましたが、それぞれの記述に共通することがあります。新島は21年間で自身のなかに構築した当時の日本の文化への理解と批判をもって、比較対象となる文化を相対化しました。特に外国文化に対して初めてこれを試みたのが函館になります。そこには、積極的な外国文化の批判ではなく、外国文化への理解と敬意、同時に冷静な分析が含まれています。こうした結果、新島は何を考えるに至ったのかは分かりませんが、結果として密出国につながりました。

おわりに

最後に密出国の過程に触れておきます。新島は密出国の2日前の6月12日、ポーター商会にいた福土宇之吉の紹介でアメリカ商船船長W・セイヴォリーに会い、15日未明に出発する船に乗せてもらう約束を取り付けます。その日のうちに新島は不要なものを売り払ったとあります。翌日13日は家族へ送る写真を撮影しました。髭姿の新島の写真のガラス原板が今も同志社に残っています。そして、14日、家族宛ての手紙を出したのち、夜半に新島は密出国を敢行します。

今回は最初に伝記に書かれた函館行きの理由と密出国の動機を、密出国成功後に新島が残した資料から紹介しました。そして、その後、密出国前の資料を中心に、函館行きの理由と密出国の動機を考えてきました。この理由と動機を理解するキーワードが、新島の志の内実であることは理解していただけたと思います。しかし、その内実がはっきりと分かるものは、密出国前の資料には残っていませんでした。そもそも密出国自体が国の禁を破るものですので、残している方が不自然とも言えます。しかし、今回の話の内容を総合すれば、新島の志の中身に関して皆さんそれぞれがなんらかの答えを見いだせたのではないのでしょうか。人間は複雑な思考をもつ生き物ですので、理由は一つとは限りません。私が考えるのは、少なくとも外国人や外国文化との積極的な接触を意図して函館行きを考え、函館での異文化体験が密出国を決意させたことです。そして、それには彼の志が深く関係しており、その志が向かう方向性は国家への貢献であったと考えます。志のなかには西洋文明の摂取が含まれていたことは確実ですが、外国に出向いて直接摂取しようと考えさせるだけの体験がどこにあったのか、まだまだ調べる必要があるかと思います。本日の話が、150年前の新島の気持ちに寄り添い、彼の志を考えていただける契機となればと思います。ご静聴ありがとうございます。

〔参考文献〕

同志社編『新島襄—その時代と生涯』 1997年
新島襄全集編集委員会編『新島襄全集5』同朋舎出版
1984年 同志社新島研究会編『新島研究』59 1980年

2014年6月10日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺校地「講演」記録